

I はじめに

現在、公共職業訓練校のかかえる大きな問題の一つに、訓練生の減少の問題がある。このことは、新規中卒者の高校進学の問題と絡んでいることはいうまでもなく、この問題が職業訓練関係者の間で関心をもたれるようになってすでに久しい。そしていま、労働省の“49年3月の求職動向調査”によると、49年3月の中学校新規卒業予定者は161.7万人で、このうち被雇用希望者は、8.2万人であると推定されている。すなわち、新卒者のうち被雇用希望者の占める割合は5.1%で、約20人に1人の割合であるにすぎず、公共職業訓練が中卒者を対象として訓練を行なおうとするかぎり養成訓練はわずか8.2万人を対象とすることになる。しかも、この被雇用希望者数は今春(48年3月)の卒業者と比べて17%の減であり、この減少傾向は今後もかわらないであろうとされている。すなわち、このような実状から、公共職業訓練校で行なう養成訓練の対象を新規中卒者に求めることは、いまや絶望的であるといわざるをえない。そこでいきおい、養成訓練は高卒者を対象とせざるをえなくなり、その給源は前記調査によると49年3月卒業の高校新規卒業予定者は134.7万人で、このうち被雇用希望者である56.1万人のうちにその対象をみい出す可能性があることになる。

しかしながら、公共職業訓練が依然として過去のイメージから脱却しないならば、養成訓練の高卒化が必ずしもこの制度の危機を救うことにはつながらないと思われる。たとえば、社会一般では職業訓練校を評して“進学競争からはみ出た子供たちの集っているところ”と考えているようである。また、そこで行なわれている職業訓練は、労働経済的側面に強く焦点をあてられて理解されがちであるし、ややもすると、社会政策的側面で理解されることもある等、公共職業訓練に対する理解のされかたには統一性がない。この統一性のないことが職業訓練というものの理解のしかたを複雑にし、それが社会一般と融和しにくくし、訓練生募集に関しても微妙に影響していると考えるのである。しかしながら、職業訓練はあくまでそれを受ける者にとって“ためになる”ものでな

くてはならないと考えるし、また、そのように社会一般に理解されることを強く期待するものである。

この修了生の追跡に関する研究は、職業訓練を受けることによって一人ひとりの訓練生が得るメリット、デメリットを明確にし、職業訓練を社会一般に正しく理解させる必要性を感じたからである。というのも、これまで職業訓練校とはなになのか、そこに学んでいる人たちはどのような意識にもとづいて入校してきたのか、そして、訓練校を修了することによって、訓練生自身にとってどのような意味があるのかと尋ねられたとき、残念ながらそれに答えることのできる十分な資料の蓄積はない。これまでしばしばみられる調査報告も、概して定着状況あるいはそれに付随した労働条件等の実態について論ぜられるにとどまり、必ずしも職業訓練を受けたことの効果について、個人の側からみた研究が充実しているとはいえない実状にある。このことは、実は職業訓練を受けたことの効果が莫として社会一般にとらえられている以前に、職業訓練関係者にとっても莫としてはいなかったかと考えるのである。たとえば、われわれは日々刻々と変化する社会に毎年数多くの若者を送り出しているが、このことは、多くの現場の指導員にとって必ずしも心安らかなものではないということを知られている。“自分の教えた生徒はいま何をしているか、自分の教えたことは間違っていなかったか、社会人として恥しくない人間になっているだろうか”ということは、指導員にとって共通した不安であるという。しかし、この不安に答えるものがないことが現場の指導員をして職業訓練を“闇夜の針の糸通し”的状況においてきたといっても過言ではないであろう。

こうした基本的な問題を一つずつ解明することによってわれわれ自身、職業訓練に納得し、社会一般に対しても正しい理解を求めることができるのではないかと考えるのである。

こうした意味において、公共職業訓練が個々の訓練生に与えた訓練の効果、メリット、デメリットいずれにしても事実を事実として摘出し、これを検討することにより、とかく間違った方向に理解されがちな職業訓練を少しでも正しく理解してもらうため、また、いま行なわれている職業訓練の体質の改善施策の一助

となればと考えてこの研究に着手したのである。

Ⅱ 調査の目的

“はじめに”で述べた問題意識を解明するためには、客観的データにもとづいて実態を分析する必要がある。そこで、訓練校以外の教育機関を卒業した者との比較、さらには、訓練校修了生および訓練校以外の教育機関の卒業生を客観的に評価することのできる第三者に対しても資料の収集を行なうことが必要であると考えた。しかし、本調査では、とりあえずその第一段階として職業訓練校の修了生を対象とする追跡調査を実施することにし、その目的を次の二点に絞って計画した。

1. 訓練校修了生が訓練校で学んだ技能や知識を職場生活において、どのように活用しているかという問題を訓練の効果として把握する。
2. またどのような問題で悩み、どのようなことを望んでいるか等を適確に把握することにより、修了生の期待する職業訓練とは何であるかを確認する。

Ⅲ 調査の枠組み

そこで、まずこの研究をはじめるとあたって、訓練校修了生の追跡に関する資料を収集することが現場の指導員の間でどの程度期待されているかについて調べてみたところ、その期待は表1にまとめたとおり予想以上に大きいことがわかった。

表 1

訓練生の追跡調査に関する意見

- ※ いづれも原文のまま
- ※ モニターアンケートより

※ 必つしも訓練校での成績のよいものが実社会において成功しているとは限らない。現に私校においても離職する率は比較的多いと思う。従って、現

職に定着して、職場の中核となって励んでいる卒業生の在校中等の成績その他を調査してみるとにより、今後どのような訓練生を求めるべきかの指針になるかと思えます。全国的な調査をすることにより、訓練生の自信も自から出来ると思えます。又、卒業生で立派な職業人を何かの機会に全国板で紹介するのもよいと思えます。(愛媛総訓・N・U)

※ 自分の学んだ職種を終了して就職した職業が嫌になり転職した理由

- ・終了と同時に自分の学んだ職種と全く関係のない仕事につく理由
- ・本人の能力をひきだすための資料調査の研究 (富山総訓・Y・Y)

※ 訓練生募集についてのデータとか、個々の訓練生の特性に合った訓練の内容調査等のデータがあればと思っております。(静岡総訓・T・A)

※ 各訓練職種ごとの社会の要求する技能者と現実の訓練生の適性と能力についての素質比較 (福山総訓・U・O)

※ 訓練校修了生の就職した人達の現在仕事している内容と訓練校で勉強した内容の相異、又訓練内容を振り返っての感想 (小野田総訓・A・K)

※ 在校生の素質調査の続行もさるものの、卒業生についても追跡調査をして欲しい、立体的な調査により、職業訓練体制の確立は訓大を中心にして行なわれると信ずる。(広島総訓・C・O)

※ 素質調査を続けると共に、訓練生の意識調査もこの調査データの様に整理分析されると生活指導の面においても役立つように思われる。

(熊本総訓・T・O)

※ 訓練生の調査としては修了された人の追跡調査(短期的なものではなく、長期的なしかも訓練校の訓練がどのように役立っていないかという点が最重要である。)

(静岡総訓・S・U)

※ 今日、資的・能力的に普通以下とみられている訓練生が社会にあるいは企業に巣立ち、就職してからの動行、素行など企業側からの信頼性、期待等についての追跡調査による資料も興味あるものと考えます。(小浜総訓・M・T)

※ 訓大調査研究部では、全国の公共訓練校の指導員のうち、約40人にモニターを依頼し、調査研究部で行なう業務についてご意見、ご助言をいただいている。表1はそうした意見、助言の一つである。

表1はごく限られた一部の指導員の声であるが、こうした要望を裏がえしてみると、訓練と職場生活との関係について論ずるとき、また、修了生と職業訓練校との結びつきについて論じようとするとき、その議論は、ときに実証的に分析された裏付けが少ないままに続けられてきたのではないかと思われるのである。

このような認識のもとにこの調査は始められたのであるが、それに先だっていま一つ確認しておかねばならない問題がある。それは、この“追跡”に関する調査資料が少ないとはいえ、皆無でもないということである。この既存の資料をこまかく分析することによって、これからはじめようとする調査の“核”があらためて確認されるはずである。そこで、昭和45年から47年にわたる3年間に“追跡”に関して実施された調査を洗い出し、その内容の検討をすることにした。この先行調査の洗い出しの対象は全国の総高訓と都道府県庁で、これらに既存の調査資料の送付を依頼したところ、8総高訓と5都県から資料の送付を受けた。得られた調査資料の内容を分析すると表2のようになるが、この結果からわかるように調査の中心は修了生本人の属性及び労働条件、福利厚生などが総花的に設問されており、職業訓練を受けたことに対する意識や効果などは必ずしも調査の重点とはなっていない。

そこで本調査では、できるだけ職業訓練を受けたことに対する効果を幅広く分析するという視点に立って調査を実施しようと考え、表3のごとく調査の枠組みを設定した。

IV 調査の対象および方法

そこで、本調査はさきに調査を実施した“総高訓生の素質調査”対象校のうち、昭和43年より45年にいたる三ケ年を継続して調査した訓練校（岩手，茨城，神奈川，鳥取総高訓）に訓大附属総訓を加えた五校の機械科，自動車整備科，電気機器科，板金科，溶接科の38年，40年，42年，44年，45年，46年，47年3月修了生を対象とした。対象者の実数は表4のとおりで

表 2

訓練校・都道府県庁の実施による追跡調査の内容

調査内容	実施体	事業規模	入社理由	賃金	勤務時間 (休憩・残業含)	通勤方法	福利厚生	寮	職務内容	勤務態度	離職	転職	適応	技能検定	人間関係	余暇	生活指導	修了生の意識	訓練の効果	訓練校への希望	事業主への希望	進学
	A	○		○	○		○									○			○	○	○	○
	I			○	○	○													○	○		○
	C			○	○		○								○				○	○		○
	N			○	○		○			○					○				○	○		○
	K	○		○	○		○				○								○			○
	S			○																		
	Ko	○		○									○							○		○
	F	○		○						○	○											
	I		○	○							○								○			
	T	○		○						○	○								○			
	N			○							○								○			
	G			○							○								○			○

表 3

訓練を受けたことかどのよう な型で、どの位役立っているか	訓練校修了生に対する企業側 の処遇に対し修了生はどのよ うに受けとめているか	9・10
訓練を受けたことかどのよう な型で、どの位役立っているか	人生観 〔 価値観 どのよ うな生活意識をもつて いるか 訓練で修得した技能・技術を 職場で役立てているか	1・2・5 3・6 17 18 19 25 15・24 14・39
訓練を受けたことが離転職に どのよ うに影響しているか	精神力 〔 理解力 〔 企画力 〔 指導力 技能度 〔 仕事の量 (重要度) 〔 仕事の質 (困難度) 発揮度 〔 責任度 〔 処理力 (実績) 〔 融和力 (協調性) 〔 研究心 〔 勤怠度 〔 積極性 (実行力) 〔 注意力 (安全・衛生)	32 23 21・22 16・28・30 20・26 31・33 27・29・34
訓練を受けたことかどのよ うな関係 にあるか	職業意識 〔 職業意識 〔 社会的地位についてどう考 えているか (技能労働者として の誇りをもっているか)	35 ¹ ~35 ⁶ ・4 36 ¹ ~38 ³
訓練校修了生に内蔵される問 題点	職業訓練及び職業訓練校に対する意識 " に対する希望	7・8 12・13 11 41・42・43・44 45

ある。

表4

調 査 対 象

総訓名	科名	調査対象					計
		機 械	自動車 整備	電気機器	板 金	溶 接	
岩 手		1 3 1	1 2 8	1 2 7	1 2 3	6 6	5 7 5
茨 城		1 6 5	2 0 6	1 7 2		1 4 9	6 9 2
神 奈 川		9 9	1 9 2	5 3	9 0	7 4	5 0 8
鳥 取		1 2 2	1 2 7		1 1 6		3 6 5
訓大附属		1 3 6	1 3 5	1 0 1	7 0	7 2	5 1 4
計		6 5 3	7 8 8	4 5 3	3 9 9	3 6 1	2,6 5 4

調査は上記対象者の保護者に対して本人の勤務先及び現住所を確認するための往復ハガキを発送し(47年8月現在)、そのうち、勤務先及び住所の確認できた1597人に対して、昭和47年9月(但し、47年3月修了生については47年10月)に調査票を郵送したところ、956通(59.8%)の回収を得た。調査票発送数及び回収数は表5のとおりであるが、このうち14通の不良を除いた942通を有効回答として処理した。

表5

調 査 票 回 収 率

総訓名	回収率	調査票回収率		
		調査票発送件数	調査票回収件数	調査票回収率
茨 城		3 9 6 通	2 1 7 通	5 4.8 %
神 奈 川		2 7 6	1 7 4	6 3.1
鳥 取		2 2 1	1 4 0	6 3.4
訓大附属		3 4 2	2 3 1	6 7.5
岩 手		3 6 2	1 9 4	5 3.6
計		1,5 9 7 通	9 5 6 通	5 9.8 %

なお、本調査における照合事項は、原則として、全体傾向、学歴別(中卒・高卒別)、年代別(昭和38, 40, 42, 44, 45, 46, 47年3月修了生)、及び科別

(機械, 自動車整備, 電気機器, 板金, 溶接)におこない、それに必要に応じて、興味検査の得点別(技能的・機械的ともに30パーセント以下「Bグループ」、40～70パーセント「Mグループ」、80パーセント以上「Gグループ」)に分析をおこなったほか、各質問事項間のクロスをも一部おこなった。

本調査の照合事項に該当するサンプル数は表6のとおりである。

表6 有効回答数

	全 体	9 4 2 件
学 歴 別	中 卒 者	7 3 4
	高 卒 者	2 0 8
年 代 別	3 8 年 3 月 修 了 生	1 2 5
	4 0 年 "	9 4
	4 2 年 "	1 1 7
	4 4 年 "	1 1 6
	4 5 年 "	1 6 0
	4 6 年 "	1 5 1
	4 7 年 "	1 7 9
科 別	機 械 科 修 了 生	2 5 7
	自 動 車 整 備 科 "	2 6 2
	電 気 機 器 科 "	1 7 1
	板 金 科 "	1 4 5
	溶 接 科 "	1 0 7
興 味 検 査 得 点 別	技能的・機械的ともに 30パーセント以下 (Bグループ)	2 5
	40～70パーセント (Mグループ)	5 0
	80パーセント以上 (Gグループ)	4 0

V 調査の結果

本調査を分析したところ、概ね次のような発見諸事実を得た。

◇ 1. サンプルの構成と特質について

- (1) この調査で分析の対象となった訓練校修了生は中卒者734人、高卒者208人の総計942人である。
- (2) そして、修了生の約55%は企業規模300人以下の企業に、14%は企業規模301人以上1,000人未満の企業に勤めており、企業規模1,000人以上の企業に勤める者は約30%である。(F4)
- (3) このうち約30%が寮やアパート等に居住して、親元からはなれて生活しているが、残りの70%は自宅から通勤可能なところに職場を求めている。この自宅通勤者は、中卒者(67.4%)よりも高卒者(73.1%)、そして40年修了生(79.8%)と、自動車整備科の修了生(75.2%)に高くみることができる。(F2)
- (4) また、修了生の約48%は技能労働者として働いているが、本人の回答をそのまま分析すれば約34%の者が技術系の仕事をしていることになる。(F3)
- (5) なお、自動車整備科(42.4%)、電気機器科(38.6%)には“技術系労働者”であるという者が比較的高く表明されている。(F3)
- (6) そして修了者には、独立自営者として働きたいという気持のあることを読みとることができるが、この傾向は序々にではあるが職務経験が長くなるにつれて実現している。(F3)
- (7) しかし、その一方で“技能労働者”である者は修了時の年代が古くなるにつれて減少し、47年修了生で54.6%いた者が、38年修了者では、36.8%しかいない。(F3)
- (8) すなわち、営業系労働者として働いている者が年々多くなっていく傾向と相反していることがわかる。(F3)

◇ 2. 生活意識について

- (9) まず、訓練校修了生の“興味”の対象は非常に多様化しており、絶対的に多数を示すものはみあたらない。そうした中で、“仕事”に関するものを興味の対象であると答えた者は全体で8.1%であり、順位からいえば、

第5位に位置している。(Q1)

(10) そしてもっぱら興味の対象は自己を中心とした私生活に高く表明されているが、この傾向はQ3においてさらに明らかになる。すなわち、仕事について、“私生活中心”と答えた者は全体の31.2%、そして“仕事と私生活の両立”と答えた者は50%であるのに対して、“仕事中心”と答えた者は5%にすぎないことからわかる。(Q3)

(11) しかしながら、もう一つ別の側面から修了生を分析すると、やや異った点を見つけることができる。それは、彼らの“悩み”の中に“仕事を向上させるための勉強”あるいは“仕事のことや人間関係”と答える者が33%あまりいることである。(Q2)

(12) また、一般的な問題として彼らは“どのような生きかた”に価値を認めているかという点、約1/3の者は“尊敬されること”であるといひ、“立派な技能者になること”(14.7%)は必ずしも価値のあることだとは考えていない。(Q5)

(13) しかしながら、これを自分の将来の問題としてとらえる場合、その受けとめかたは若干異なっている。すなわち、自分自身の発展を期待するために、“優秀な技能者として成長したい”(31.8%)と考え、場合によっては、専門にこだわらず他の仕事をしてみたいと考えている。(Q8)

(14) そのためには、“努力する”ことに同調する者は80%にも達している。
(Q6)

◇ 3. 企業側の処遇に対する受けとめかたについて

(15) 職業訓練を受けたことが会社によって認められ、給与の面で優遇されていると思っている者は全体の10%にもみえない。また“少しはよいのではないかと思う”と答えた者を含めても、その数は50%を若干上まわるにとどまり、“わからない”とする者を含めた約45%は、訓練校修了生であることが給与面に加味されていないと考えている。(Q9)

(16) また、職場配置に関しては、約46%の者が訓練内容と“同じ職場”で働いているが、“まったく異った職場”にいる者も15%いる。(Q10)

(17) そして訓練内容と“同じ職場”にいと答えた者は中卒者(42.5%)より高卒者(56.4%)に、また“まったく異った職場”と答えた者は、高卒者(10.6%)より中卒者(15.9%)に高く表明されている。
(Q10)

◇ 4. 能力について

(18) まず“現在の仕事をやりとげるのに十分な知識・技能をもっているか”と各人のもつ能力について全般的な問いかけをしたところ、“十分な力をもっている”、“同僚と比べても見劣りしない”と答えた者は約30%でかなり低いといえる。
(Q14)

(19) しかし、自分の将来の仕事を遂行することについては、77%の者が、“ある程度以上の自信がある”と答えており、かなり積極的な回答をよせていることがわかる。
(Q39)

(20) これを年代別にみると、38年修了生から42年修了生までと、44年修了生から46年修了生まで、および47年修了生の三つの階層にわけることができる。すなわち、古い年代層では約85%が、中間層では約75%が、そしてもっとも若い47年修了生では65%が、技術革新や仕事の内容が高度化されても、それにある程度ついていくことができると考えている。
(Q39)

(21) そして、“能力”というものをできるだけ多角的にとらえて、訓練生が表明する自信の内容を分析した結果、ある能力については積極的回答が非常に高く表われるものがあることがわかった。
(Q15~34)

(22) すなわち、全体として積極的回答(「はい」に該当するもの、但しQ25については「いいえ」に該当するもの)が高く(70%以上)表明された項目は、“企画力”“指導力”“人の意見を聞く”“勉強をする”“責任感”等の5項目である。
(Q18, 19, 21, 28, 32)

(23) 逆に、積極的回答が低く(40%以下)回答された項目は、“理解力”“研究心”“歩どまり”“表現力”“意見の具申”“安全”等の6項目である。
(Q16, 17, 27, 30, 31, 33)

- (24) この能力に関する質問(Q15~Q34)の積極的的回答は一般的にいえば中卒者よりも高卒者に高く表明されているが、“指導力”, “仕事の速度”, “規律”, “安全”の4項目については中卒者に積極的的回答が高くみられる。しかし、そのパーセンテージの差は同等か、もしくは僅少で、年度別の38年修了者と47年修了者との間にみられるような顕著なものではない。(Q19, 20, 25, 27)
- (25) すなわち、年度別に分析すると、若い年代よりも古い年代にいくにつれて積極的的回答のパーセンテージは高まっている。(Q15~34)
- (26) しかし、この傾向も大まかにいえば40年修了者までで、38年修了者については、伸びなやみの傾向、もしくは下向の現象がみられ、修了後8年ないし9年を一つの“壁”としてとらえることが出来そうである。(Q15~34)
- (27) 科別にみると、もっとも積極的的回答の総計が高くあらわれた科は自動車整備科で、ついで板金科、電気機器科、機械科とつづき、溶接科修了者をもっとも低い。(Q15~34)
- (28) 興味検査の得点別では、一般的にいえば、全体の平均よりも下まわっているものが多くあることが目につくが、これは、興味検査の対象者が、45年、46年、47年修了生と、若い年代の者に限られているためである。(Q15~34)
- (29) 得点別でBグループとGグループを比較すると、“熟練度”, “歩どまり”, “意見の具申”についてはBグループのほうに若干積極的的回答を表明する者が多いが、他の項目についてはいずれもGグループのほうに高く表明されている。(Q15, 30, 33)
- (30) しかし、MグループとGグループを比較すると、必ずしもGグループのほうに積極的的回答が高くあらわれるとは限らない。むしろ、Mグループに同等ないし高くあらわれる傾向が20問中16問あり、そのうちとくに、“人の意見を聞く”, “知識の活用”, “歩どまり”, “安全”の4項目についてはGグループよりMグループのほうに10%以上、積極的的回答が

多い。

(Q21, 23, 27, 30)

- (31) Q16, Q28, Q30は“研究心”について回答を求めたものであるが、その結果、Q28(勉強をすること)にのみ積極的的回答が高く(77.5%)表明された。
(Q16, 28, 30)

◇5. 転職について

- (32) “転職”することについて訓練校修了生の56%にあたる者は肯定的な態度をとっているが、そのうちの約半数にあたる29%の者は“訓練内容が生かせる転職ならば”という条件づきの肯定者である。
(Q4)

- (33) しかし、転職を自分自身の問題として考えるとき、必ずしもこの肯定的な態度が行為に結びついていないことがわかる。すなわち、Q4とQ35をクロス集計した結果、転職に積極的・肯定的意見をもつ者でも実際の転職率は40%であった。また転職に否定的意見をもつ者の転職率は20.7%であった。
(Q4×Q35-1)

- (34) 本調査で解明された定着率は全体で68.4%であり、これを学歴別にみると中卒者で67.7%、高卒者で71.1%である。

(Q35-1)

- (35) さらに居住形態別に転職者を分析すると、社宅・寮あるいはアパート等から通勤する者(27.1%)よりも自宅通勤者(33.1%)に転職率が高いことがわかる。
($\frac{Q35-1}{\times F2}$)

- (36) 転職の時期(一ばんはじめに勤めた会社での勤続期間)は、一年以内の転職では高卒者(25.4%)より中卒者(29.4%)のほうが高いが、一年以上二年以内の勤続者は中卒者(20.4%)よりも高卒者(30.2%)のほうが高い。なお、一年以内の転職率は二回目の転職(32.1%)、三回目の転職(36.0%)、四回目の転職(45.1%)、と回を重ねるごとに高くなっている。
(Q35-2)

- (37) 一ばんはじめに勤めた会社を一年以内に転職した者の多い科は電気機器科(36.4%)、板金科(34.0%)、溶接科(33.3%)で、機械科(

25.6%)と自動車整備科(23.0%)は比較的少ない。(Q35-2)

(38)そして訓練校を修了して一ばんめに勤めた会社での職務の内容が訓練の内容と“まったく異っていた”と回答した者は、46年修了生(13.6%)47年修了生(12.5%)および電気機器科(15.9%)、板金科(10.6%)に高く表明されている。(Q35-2)

(39)そして今の仕事に“非常にやりがいを感じている”者は転職経験のない者(5.6%)よりも転職経験者(18.3%)に高く表明され、逆に“いますぐやめたい”者は転職経験者(2.1%)よりも転職経験のない者(6.4%)に高く表明されている。この傾向は中卒者よりも高卒者に顕著にみられる。(Q111
×Q35-1)

(40)転職することの可否を“給与”と訓練の内容を生かした“職務”の二つの要因に限定して分析すると、“給与が高くなり、仕事も訓練内容と同じ”と二つの要因を満たす者の率は転職を重ねるごとに減少している。すなわち、転職一回目では24.9%の者がいたが、二回目では19.7%、三回目では15.7%であり、四回目では13%に落ちこんでいる。(Q35-2)

(41)また逆に転職することによって“給与が低くなり、仕事も訓練内容と異なる”という、二つの要因をすべて満足していない者の率は、転職一回目から三回目までは約6%と横ばい状態であるが、四回目では8.8%となっている。(Q35-2)

(42)こうした転職経験者の転職理由は、中卒者では“外面的な満足感”や“自己を中心”とするもの、あるいは“人間関係”に求めることが目立っているが、高卒者は“給与を含む労働条件”や“仕事を中心”としたもの等の実質的なものを転職理由としている。(Q35-3)

(43)しかし転職にはしらせた上記の理由が、そのまま次の就職のときの就職理由と一致しているとはいいがたい。(Q35-4)

(44)そして次の職場に就職しようとするとき、訓練校を修了していたことが役立ったと思っている者は全体の18%であるがとくに45年修了生(38.4%)と溶接科(27.8%)に高く表明されている。さらに、“資格・

免許をもっていた”ことが転職に役立ったと思っている者は38年修了生(23.3%)と自動車整備科(33.3%)に高く表明されている。

(Q35-6)

◆ 6. 学歴および技能検定について

(45) 訓練校修了生のうち48.3%にあたる者は、高校や大学に進学しようと考えたといっている。(Q36-1)

(46) この傾向は、高卒者(33.7%)より中卒者(52.4%)に、また年代の若い者よりも古い者にいくにつれて高く表明されている。(Q36-1)

(47) 中卒者のうち進学について考えたことがないと答えた者を科別にみると自動車整備科(45.3%)、板金科(50.0%)に比較的高く見れる。

(Q36-1)

(48) これらの進学しようと考えた者について、その理由を尋ねてみると“社会的に認められないから”を含んで“学歴取得”を目的としたものもとても高く表明されており、この傾向は高卒者(~~22.3%~~^{24.3%})より中卒者(~~42.3%~~^{42.3%})に強くみうけられる。(Q36-2)

(49) そして、実際に進学した者は全体で13%、中卒者で15.7%、高卒者では3.4%である。また年代別では年代の若い者より古い者にいくにつれて進学率は高くなっている。(Q36-3)

(50) なお、科別で進学率の低いのは、中卒者の場合自動車整備科(10.9%)と溶接科(10.6%)である。(Q36-3)

(51) Q37-1で表明された一・二級技能検定合格者の中には、“技能検定合格”を“受験資格”あるいは他の“免許・資格”と混同して考えている者も含まれていると思われるが、本人の回答をそのまま分析すると、一・二級の検定合格者は中卒者(20.3%)より高卒者(37.0%)に、また年代別でも若い年代から古い年代にいくにつれて合格率は増加している。

(Q37-1)

(52) 科別で合格率の高いのは自動車整備科(45.2%)と溶接科(45.8%)で他の三科と比べて目立っている。(Q37-1)

(53) 以上の結果を含めて、訓練を受けたことが今の仕事に“非常に役立っている”と答えた者は中卒者(38.1%)よりも高卒者(52.4%)に高くみうけられる。(Q38-1)

(54) また科別では自動車整備科(55.0%)に目立っている。(Q38-1)

(55) 逆に“役立っていない”と答えた者は高卒者(4.8%)より中卒者(10.5%)に高くみられる。(Q38-1)

(56) “非常に役立っている”と答えた者について、その理由を尋ねると、全体としては“技能”の習得をあげている者が51.6%で、“知識”を習得したと答えた者は39.1%である。また、中卒者は“技能”の習得をしたことが役立っていると答えているが、高卒者は逆に“知識”を習得したことを理由にしている。(Q38-3)

(57) 一方、“役立っていない”と答えた者の理由は“会社が自分に適した仕事をくれない”からと答える者がもっとも多く(25.3%)、この傾向は中卒者(24.6%)より高卒者(30.0%)にやや高く、また一般に古い年代層よりも若い年代層に高くみうけられる。そして、科別では電気機器科(44.4%)がもっとも高い。(Q38-2)

◇7. 技能者としての誇り

(58) 働く目的を“賃金”を得るためと答えた者は中卒者(15.0%)に高く、高卒者(10.6%)に低く表われており、“社会的成功”については中卒者(7.8%)より高卒者(12.0%)に高く表明されている。(Q7)

(59) そして、全体の32%にあたる者は“優秀な技能者として過したい”と技能労働者として生活する心構えと誇りをもっているが、このことは高卒者(26.9%)より中卒者(33.2%)に、また47年修了生(40.2%)と機械科(36.2%)、電気機器科(36.8%)に高く表明されている。(Q8)

(60) これを別の側面すなわち、技能労働者の職務の内容から価値を求めた結果、64%あまりの者は“ものを作る”ことに喜びを感じているが、“損

な立場”であるという者も全体で16%いる。(Q12)

(61) このことを転職経験の有無とクロス集計してみると、“喜び”を感じている者は転職経験のない者よりも転職経験のある者に高くみられる。

($\frac{Q12}{\times Q35-1}$)

(62) ところで、こうした問題を含めて、現在の仕事に“やり甲斐を感じている”者は全体で57.7%いるが、このことは中卒者(55.5%)より高卒者(65.4%)に、また、“非常にやり甲斐を感じている”者に限ってみると、年代の若い者より古い者にいくにつれて増加していることがわかる。

(Q11)

(63) 科別では自動車整備科(14.1%)に“非常にやりがいを感じている”者がもっとも高い。(Q11)

◇ 8. 職業訓練および職業訓練校に対する意識について

(64) 職業訓練の効果および職業訓練校への帰属意識は一般的にいつてかなり高いといえる。(Q41~44)

(65) それは、訓練修了生がいま身につけている知識や技能の習得は、職業訓練校のカリキュラムをとうして得たものであると回答するものが全体の71.2%いること、そしてこの傾向は中卒者(70.3%)より高卒者(74.5%)に高く表明されていることからわかる。(Q41)

(66) また、このことは若い年代から古い年代にいくにつれて減少しているが大別して修了後3年目、修了後4年目から8年目、修了後10年目の三階層に特徴がある。(Q41)

(67) 上記の特徴は、“仕事をしながら自然と”および“独力で勉強した”という二つの項目についてもみうけられるが、この場合は逆に、若い年代から古い年代にいくにつれて増加している。(Q41)

(68) なお、科別では、“訓練校で修得した”と答えた者は、電気機器科修了生(63.7%)がもっとも低い。(Q41)

(69) 上述のように、いま身につけている知識や技能を訓練校以外の機関あるいは方法で修得したと答えた者も約30%いることがわかったが、そうし

- た人たちをも含めて訓練校の修了生であることが、これからの人生に“プラスになると確信する”者は全体で26.3%であり、中卒者(25.2%)より高卒者(30.3%)に高いことがわかる。(Q42)
- (70) また科別では自動車整備科(32.8%)、板金科(29.7%)が高い。(Q42)
- (71) さらに、“プラスになるような気がする”者を加えて分析すると、全体の約83%のものは訓練校の教育に対して肯定的な意見をもっていることができる。(Q42)
- (72) しかしながら、第三者に対して進路の選択等について相談された場合、もっとも高く表明される意見は、いわゆる進学(38.0%)であって、中卒者は高校へ、高卒者は大学に進むことを勧めたいと答えている。この傾向は高卒者(35.1%)より中卒者(38.8%)に、また、機械科(44.3%)、電気機器科(42.0%)に高く表明されている。(Q44)
- (73) そして、進路選択の第一番目に“職業訓練校”を勧めるものは全体の28.2%であるが、これも“進学”同様に高卒者(26.0%)より中卒者(28.9%)に高く表明されている。そして、科別では、板金科(35.9%)、自動車整備科(33.6%)、溶接科(31.8%)の順に訓練校へ入校することを勧める者が多い。(Q44)
- (74) ところが、もし仮りに“職業訓練校に入校する”ことについて相談を受けた場合、“自信をもってすすめる”者は20.5%であるが、中卒者(19.1%)より高卒者(25.5%)が肯定的に回答していることが目につく。(Q43)
- (75) また、科別では自動車整備科(29.4%)、板金科(22.0%)に高く表明されている。(Q43)
- (76) そして、“相手が希望していればすすめる”という、やや消極的肯定者を含めて考えると、全体の約90%の者は訓練校への進路に対して肯定しており、“決してすすめない”者はわずか1.9%にすぎない。(Q43)

◇ 9. 職業訓練および職業訓練校に対する希望について

(77) Q 4 5 の自由記述欄では全体で 6 1 5 人 (6 5. 3 %) が記述している。

この記述率は中卒者 (6 2. 1 %) より高卒者 (7 6. 4 %) のほうが高い。

なお、記述の内容は表 7 のとおりで () 内の数字は表明件数に対する割合で

ある。 (Q 4 5)

表 7 Q 4 5 の内容別表明件数

内容	学 歴		計 (6 1 5 人)
	中 卒 者 (4 5 6 人) N=8 1 1 件	高 卒 者 (1 5 9 人) N=3 0 2 件	
A 教育訓練の内容			N=1113 件
1. 教育内容一般	49 (6.0)	17 (5.6)	66 (5.9)
2. 学 科	33 (4.1)	10 (3.3)	43 (3.9)
3. 実 技	81 (10.0)	37 (12.4)	118 (10.6)
4. 一般教養科目	67 (8.3)	10 (3.3)	77 (6.9)
5. 道徳・美 規律 および技能者の心得	58 (7.2)	31 (10.3)	89 (8.0)
6. カリキュラム編成	29 (3.6)	7 (2.3)	36 (3.2)
7. 訓 練 期 間	54 (6.7)	5 (1.7)	59 (5.3)
8. 混 合 訓 練	9 (1.1)	6 (2.0)	15 (1.3)
9. クラブ活動・自治会	25 (3.1)	9 (3.0)	34 (3.1)
10. 生 活 指 導	28 (3.5)	2 (0.7)	30 (2.7)
11. 制 度	3 (0.4)	1 (0.3)	4 (0.4)
12. 管理者としての教育	1 (0.1)	1 (0.3)	2 (0.2)
B 職場における適応			
1. 最新の技能の習得	13 (1.6)	12 (4.0)	25 (2.2)
2. 実社会で役立つ技能・知識	31 (3.8)	16 (5.3)	47 (4.2)
C 訓練校の施設・設備			
1. 教具・教材の充実	14 (1.7)	17 (5.6)	31 (2.8)
2. 施設・設備の充実	28 (3.5)	13 (4.3)	41 (3.7)
3. 環境・イメージ	17 (2.1)	6 (2.0)	23 (2.1)
4. 寮	15 (1.8)	6 (2.0)	21 (1.9)
D 指 導 員			
1. 指導員の資質・人数	9 (1.1)	18 (6.0)	27 (2.4)
2. 教育方法・技法	18 (2.2)	2 (0.7)	20 (1.8)
3. 企業との関係	1 (0.1)	1 (0.3)	2 (0.2)
4. 生徒との接し方	23 (2.8)	9 (3.0)	32 (2.9)

E 資 格			
1.入校資格の制限	13 (1.6)	5 (1.7)	18 (1.6)
2.学 歴 附 与	37 (4.6)	1 (0.3)	38 (3.4)
3.職種に関連する資格	8 (1.0)	8 (2.6)	16 (1.4)
4.社会的評価	15 (1.8)	3 (1.0)	18 (1.6)
5.雇 用 条 件	4 (0.5)	2 (0.7)	6 (0.5)
6.職業訓練の効果	4 (0.5)	4 (1.3)	8 (0.7)
F 就 職			
1.会社(現場)実習	24 (3.0)	8 (2.6)	32 (2.9)
2.就 職 幹 旋	29 (3.6)	3 (1.0)	32 (2.9)
G そ の 他			
1.近 況	14 (1.7)	3 (1.0)	17 (1.5)
2.思い出・感謝	14 (1.7)	11 (3.6)	25 (2.2)
3.後輩に対する助言	1 (0.1)	1 (0.3)	2 (0.2)
4.訓練校の役割り	1 (0.1)	1 (0.3)	2 (0.2)
5.修了後の訓練	0 ()	1 (0.3)	1 (0.1)
6.文献・図書を紹介	1 (0.1)	1 (0.3)	2 (0.2)
7.同窓会的組織	2 (0.2)	1 (0.3)	3 (0.3)
8.そ の 他	38 (4.7)	13 (4.3)	51 (4.6)

()内は表明件数に対する割合

VI 調 査 の 要 約

本調査の結果(発見、諸事実)から、次のように要約することができる。

(1) <結果の10・11より>

<結果の10>において、“仕事中心”と答えた者はわずか5%であったが、これをもって訓練校修了生の社会的態度が悪いとはいえない。むしろ、若い人たちを理解するときには、こうした傾向が一般的であることを前提にした接しかたが必要なのであろう。しかし、<結果の11>において仕事の中に“悩み”を持つ者が30%あまりいることは、回答の内容としてはマイナスの現象であっても、その気持のあり方は、自分の仕事をプラスの方向に転化させたい気持のあらわれで、“私生活中心”、“仕事と私生活の両立”

はふえても、仕事に対する意識は強くもっていると見てもよいのではないかと考えられる。

(2) <結果の12・13・14・60・62より>

修了生の価値観の中で“立派な技能者になる”ことは必ずしも主体を占めるものではなく、人から尊敬され、幸せな家庭をきずきその日その日を無事に生活するというごく平凡な生活態度が彼らの平均像であるといえる。しかし現実に技能労働者として生産的活動に従事することにも、また努力することにも同調的である。そこにあるのは、絶対的多数ではないが“ものを作る”という技能者の喜びであり、仕事のやりがいであって、そのことが技能労働者としての自分自身を方向づけていると考えられる。

(3) <結果の6より>

訓練校修了生の職業移動の形態をみると、その実数は多いとはいえないが、独立自営者が一年ごとに増加する傾向にある。このことをQ45の自由記述(調査研究資料№10)から推定すると、その多くは家業従事者と思われるが、中にはまったくあらたに独立をこころざした者もいると推定される。

(4) <結果の20・66より>

事実とはもあれ、修了生の意識の中にある“職務遂行の能力”は年代が古くなるにつれて増加し、健全な成長をとげているといえるが、その反面、訓練校で受けた訓練の効果は修了後3年目にして一つの壁につきあたっているといえそうである。

よく訓練校の修了生は就職後3年間は同じ時期に入社した同僚をリードしているが、その期間を過ぎると他の訓練を受けていない同僚と同じ程度の能力となり、さらにはリードを許す結果になるということを聞かされる。

このことは、職場生活の3年間は訓練期間と同じ役割りを果していることを示しており、個人の能力に差のあることを考慮しても、訓練校の訓練の内容や方法に問題を提起しているとはいえないであろうか。

(5) <結果の8・32・34・36・38~41・61より>

訓練校修了生の転職状況を分析すると、定説となっている若年労働者の定

着率をはるかに上まわるデータを得ることができるし(図1)、また次の就職をする場合にも、かりに“給与が高くなる”ことと“仕事の内容が訓練内容と関係がある”こととの二つから分析する限り、この二つの要因を満足して就職する者、あるいは“仕事の内容が訓練内容と関係ある”ことを満足させて就職する者は、転職を重ねるたびに減少するとはいえ、一回目の転職では30%の者がいたこと、そして転職することによって“仕事に非常にやり甲斐を感じた”者が17.6%いたことなどを考えあわせると、必ずしも下降的な転職というよりも、一般的にいえば転職を“ものにしていく”ということさえいえるのではないか。

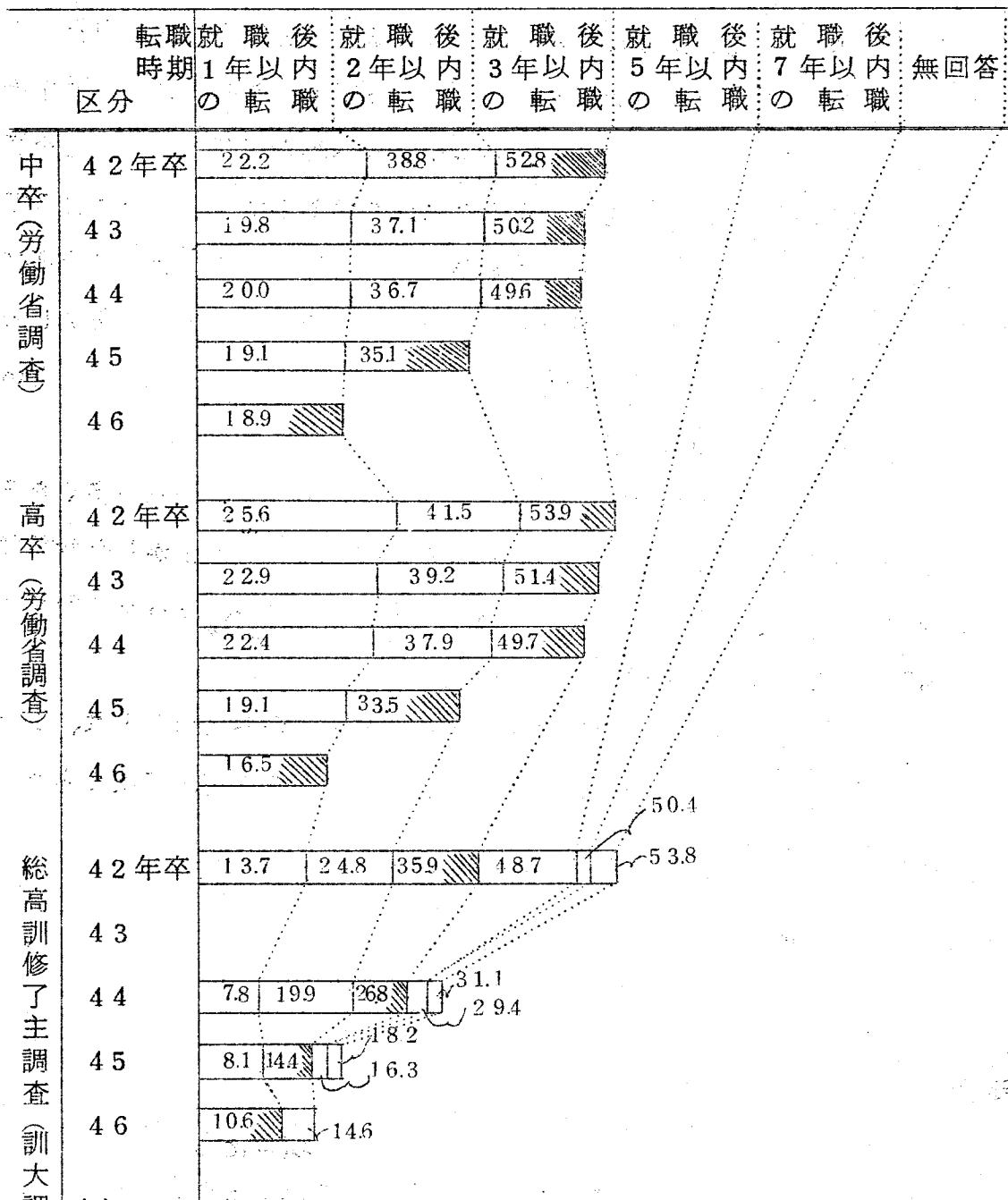
しかしながら、〈結果の8〉からわかるように営業系労働者が多くなることも事実である。このことを好意的に解釈すれば、専門を生かした営業部門で接客を主とした仕事に従事しているとも考えられるが、まったく関係のない部門への転職者もいるはずである。

こうしたことを含めて、本調査で転職についてつかみえたことは、訓練校修了生の転職は一般の常識と比較すれば、かなり地道な意識に支えられているということである。

(6) 〈結果の22・23より〉

〈結果の22・23〉で判明したように、5つの項目について70%以上の積極的回答が得られたが、この数字がそのまま訓練校修了生の能力を高く評価することにはつながらない。なぜならば、とくにQ15からQ34にわたる質問の性格は客観的な尺度によって評価されることが必要で、そのためには職業訓練をうけることなく就職した者、あるいは普通高校、職業高校の卒業生等との比較が必要だからである。

同様に、積極的回答が40%以下であった6つの項目、すなわち、“理解力”、“研究心”、“歩どまり”、“表現力”、“意見の具申”、“安全”



(注)

1. 離職率は経過年数別の累積離職率

2. 累積離職率

1年以内→1年以内の離職者数÷就職者数(調査対象者)

2年以内→1年以内及び2年以内の離職者数の計÷就職者数

(調査対象者)

3年以内→1年・2年及び3年以内の離職者数の計÷就職者数

(調査対象者)

等についてもそれが決定的にマイナスの現象であるとはいいきれない。総じてこれらの現象は、多かれ少なかれみうけられるものだからである。とくに“表現力”，“意見の具申”については、従来の技能労働者には企業の内部からも要請されていなかったという風土の中にあつて、本調査でもマイナスの現象として表明されたことはごく当然のことといえよう。しかし、新しい技能者の養成、とりわけ“腕と頭”の技能者を養成しようとするならば、“自分の考えをまとめ、発表する”ことの重要性からはさげられないものであることに留意する必要がある。

(7) <結果の4・5・57・68および集計票Q1~Q34・Q37~Q44より>

“技能”および“技術”ということばの理解のしかたに混同のあること、職務の内容が技能と技術に明確に区別することのできないもの等のあることを考えると、実質的に技能労働者である者のパーセントは集計票F3に示された数字を上まわるものと思われる。ただ、自動車整備科および電気機器科修了生に“技術系労働者”であるという意識をもつ者が多いことは、訓練校のカリキュラムの内容自体にも関係しているのであろうし、また事実、彼らの仕事の内容が“つくる”ことよりも“修理する”こと“調整する”ことに重点がおかれているからであろう。表8は各質問項目のうち、われわれの立場で好意的、あるいはそれに準ずる選択枝に回答されたパーセントを科別に比較し順位づけしたものである。(数字は積極的回答に表明されたパーセントの得点順位である。)

この表からわかることは技術的要素を含んだ自動車整備科と電気機器科が総合順位で最高点と最低点を示したことである。

すなわち、自動車整備科は、士気に関する項目では平均すると五科のうちで板金科と同位の二位に位置しているが、現実の効果に関する項目では一位に位置している。一方、電気機器科の場合、士気に関する7項目のうち5項目までは、最高得点を示して一位に位置しているが、現実に関する項目では12項目中(Q15~Q34は一項目として計算)8項目まで最低得点を示し、五位に位置しているのである。すなわち、自動車整備科修了生は士気も“まあ

表 8

✕ 士気に関する項目	機械	自動車整備	電気機器	板金	溶接	
Q 1 興味の対象は仕事	2	3	1	5	4	
Q 2 悩みごとは仕事の勉強	4	2	1	3	5	
Q 3 仕事中心	4	3	5	1	2	
Q 4 訓練内容が生かせる転職ならば	5	4	1	3	2	
Q 5 腕のよい技能者になる	5	3	1	4	2	
Q 6 努力すること	4	1	3	2	5	
Q 8 優秀な技能者になりたい	2	5	1	3	4	
	得点	2 6	2 1	1 3	2 1	2 4
	順位	5	2	1	2	4
✕ 現実に関する項目						
Q 9 給与は自分のほうがよい	4	1	5	2	3	
Q 10 訓練内容と同じ職場	3	1	5	4	2	
Q 11 仕事にやりがいを非常に感じる。	2	1	4	3	5	
Q 14 いまの仕事は充分にできる。	1	3	5	4	2	
Q 37—1 技能検定合格 (一・二級)	4	2	5	3	1	
Q 38—1 訓練が非常に役立っている	4	1	5	3	2	
Q 39 将来の仕事に自信がある	2	1	5	4	3	
Q 41 技能の習得は訓練校で	3	2	5	4	1	
Q 42 修了したことがプラスになると確信	4	1	5	2	3	
Q 43 入校することを自信をもってすすめる	5	1	3	2	4	
Q 44 進路相談で訓練校をすすめる	5	2	4	1	3	
Q 15~Q 34積極的の回答率の総計	4	1	3	2	5	
	得点	4 1	1 7	5 4	3 4	3 4
	順位	3	1	5	2	2
	総合順位	4	1	4	2	3

まあ”あるし、現実的な諸問題について、例えば溶接科の修了生ほどではないが訓練校では技能の習得ができた満足し、その技能は現在の仕事に役立っており、仕事に充分活用できるので、仕事そのものにも非常にはりあがある。また、将来の仕事にも自信をもち、訓練校に入校したことが本当によかったと思ひ、後輩たちにも訓練校をすすめたいという平均像をみい出すことができる。つまり、士気と訓練の効果とが適当にバランスされているといえよう。しかし電気機器科の場合、腕のよい優秀な技能者として過したいという意識を強くもっており、仕事のことが頭の中の片すみからいつもはなれないというタイプの平均像が五科のうちでもっとも強く連想されるが、現実に関する項目はこれらの士気に関する項目と、ことごとく逆の結果を表明している。すなわち、訓練校では技能の習得は充分にできなかったため、今の仕事に活用すること、またこれから先の仕事をする上でも不安がある。また職場でも訓練内容を生かした仕事についていないので仕事に対するやり甲斐もなく、加えて給与にも技能をもっていることが加味されていないという不満をもっている。そのような状態であるので訓練を受けたことが自分の人生に対してプラスとなると思えず、したがって後輩に対しても積極的に訓練校に入ることを勧められないという平均像をつかむことができよう。

このような事実はいったい何に起因しているのか。まず考えられることはカリキュラム自体のもつ特徴である。それは自動車整備科の場合、訓練内容に巾がないということであろう。すなわち訓練校で修得した技能が職場で比較的応用することが可能であるのに対して、電気機器科の場合、訓練の内容の巾が広すぎて、基礎的な知識や技能の習得にウェイトをかけざるをえず、その結果、現場の生産技能と訓練校で受けた教育内容とがマッチする部分が少なくなり、それが現実に関する項目のそれぞれに影響して、低く表明されたとみることができよう。

またQ41は”いま身につけている技能を習得した場所”について尋ねたものであるが、電気機器科に特徴的なことは、”訓練校で習得した”と答えた者が五科のうちでもっとも低く、逆に”仕事をしながら自然と”と答えた者が

五科のうちでもっとも高いことで、ある意味で電気機器科の特色をそのまま反映しているとみることもできよう。それは、前述のごとく訓練カリキュラムに巾があり、“即戦力”として職場でも活用しにくい性格をもっており、それ故に技能や知識の修得は訓練校の教育を基礎として職場で仕事をしながら身につけていく努力が要求される性格のものである。すなわち、“即戦力となる技能は陳腐化も早い”といわれているように、その意味では電気機器科修了生にみられる“仕事をしながら自然と”新しい技能・知識を修得する態度は教育の立場からいえば好ましいものといえよう。しかしながら、そうした態度も、将来の仕事を遂行する能力や、また“訓練校に入校したことがプラスになる”ことには結びついていない。このあたりに電気機器科の修了生を更に追跡する必要性が残されているように思えるが、“即戦力となる技能や知識を修得させることが、訓練校の教育の目的ではない”ことをも示しているように思われるのである。

(9) <結果の31・75より>

Q 28の回答の中には、質問の本意のほかに修了生のまったく別な期待がこめられていると思われる。“新しい知識や技能を身につけるための勉強をしたいと思うか”という質問の本意は、企業人としての努力の有無について質問したものであるが、回答者の中には、勉強＝進学＝学歴の取得という線上でこの質問を理解し、回答した者も少なくないようである。このことは、<結果の75>とも関連しているが、Q 45の自由記述の内容に“学歴付与(A7・E2)の問題が相当数あることからわかるように“学歴”の問題は訓練校の修了生にとって、もっとも関心の高い、かつ根の深い問題であることを示しているといえよう。

(10) <結果の48・49・58より>

修了生の価値観をめぐって、学歴別による価値の内容を分析した結果、一般に高卒者は“地位”を求め、中卒者は“賃金”に関心をもつということがいえそうである。

しかしながら一方において、中卒者の中に進学をこころみたる者の多いこと

仮りにそれが従来論ぜられた“地位→出世”という定型化されたパターンと同じものではないと修了生自信も認めているとしても、“地位＝学歴→認められることへのパスポート”としての魅力を高校進学に求めようとすることは、容易に理解できることである。

(11) <結果の50・52・54・70より>

ところが、自動車整備科および溶接科に共通していることは、訓練校のカリキュラムを通して得た技能が現在の仕事に非常に役立っており、今後の人生にとってもプラスになると考えている人が多いことである。この二科に共通していることは上述のほか、一・二級の技能検定合格率の高いことである。この技能検定合格率の中には<結果の51>で述べたように、“受験資格”あるいはほかの“免許・資格”と混同して考えている者も含まれていると思われるが、ここで必要なことは、事実の確認ではなくて、何かを“持っていること”なのである。例えば自動車整備科修了生の場合、三級自動車整備士の受験資格とガス溶接技能講習修了証が修了と同時に付与されるし、溶接科の場合にもガス溶接技能者講習修了証が付与され、また、技量検定には大部分の者が合格して修了し、それが労働条件等に反映されるという事実がある。こうした免許・資格に合格したことが職業人としての修了生の士気に与える影響は無視できないものと思われるのである。このことをさらに進学の問題と関連して分析すると、自動車整備科、溶接科の二科にはほかの三科にくらべて進学率が低く表明されているが、この何かを“持っている”者が多いことと進学率の低いことを考えあわせると、何かを“持っている”ことが“学歴”を持っているという魅力にかわる働きをしているとみることはできないであろうか。

(12) <結果の24・64・65・69・74より>

知識や技能の習得に関する積極的な回答が中卒者に比べて高卒者に高く表明されていることは、当然の結果であると受けとめられるが、“職業訓練”や“職業訓練校”に対する帰属意識についても積極的的回答が高卒者に高く表明されたことについては、新しい発見として認識してよいことであろう。

この高卒訓練修了生の職業訓練や職業訓練校に対する帰属意識が中卒者よりも高く表明されたことは、これからの養成訓練の中心的存在になろうとしている高卒Ⅱ類訓練はむろんのこと、高卒Ⅲ類訓練を推進するにあたっての明るい材料を提供するものであると考えられる。

(13) <結果の75より>

職業訓練および職業訓練校に対する不満や希望を調べてみると、かなり厳しい要求がなされ、あるものについては批判が、そしてあるものについては反省が求められているが、このことがそのまま職業訓練や職業訓練校に対して否定的態度を表明したものではないと考えられる。むしろ職業訓練や職業訓練校にかける期待は大きく、自分たちの意見や希望を述べることによって今後の職業訓練、後輩たちにとってより効果的な訓練機関であって欲しいという積極的な希望を感じとることができるのである。

Ⅶ おわりに

この調査を分析することによって良い意味にも、悪い意味にもいくつかの問題点を把握することができたし、それなりに問題点の整理をするための手がかりをつかむことはできたと考えるのであるが、しかし、ある意味でもっとも関心をもってみつめていたことが事実として目の前にあらわれたことであり、しかもそれが“莫”の莫たる所以であったことである。すなわち、本調査の“はじめに”で問題意識として述べたように、職業訓練に対する世上の理解のされかたは多様であり、ある人にとっては社会政策的立場で理解される職業訓練もある人には労働経済の立場で理解され、そしていま、この調査を分析していくにつれてつかみえたことは、修了生の考える職業訓練は“自分にとってためになるものである”という認識が大勢を占めていることである。すなわち、Q45の自由記述を読むと(調査研究資料No.10)、少数の人ではあるが、職業訓練校を修了することによって“高卒資格”が取得されるのではないかという期待をもって訓練校に入ってきた者や、そうでなくとも訓練校を修了すれば実社会

で有利に就職できたり、あるいは社会的に認められることを期待して入校した者が少なからずいることである。

たしかにわれわれは“高卒資格”の取得という方向ではないけれど、“個”に立脚した職業訓練の確立に努めている。しかしながら、現時点において、“個”に立脚した職業訓練が訓練界全体に確立しているとはいい切れない実情にあり、ましてや一般社会の人々に理解されることを期待することはむづかしいといわざるをえない。というよりも、職業訓練の関係者にとって、いま行なっている職業訓練のよりどころは何なのかという問題に答えることの必要性がより現実的なのであろう。そのようなとき、修了生の中から、たとえその考えかたに対して異論があるにしても、また事実間違いがあるにしても、“高卒資格”の取得の問題や“社会的メリットを得るため”、あるいは“自分自身の成長のため”に訓練校に入校したという意見を聞かされると、正直なところ、触れられずにすむことならば触れられたくない問題に双手で触れられたという実感から逃れることのできない気持ちにおいやられるのである。また、修了生にとって“健康な常識をそなえた社会人になりたい”という気持ちはかなり強い。このことは、訓練カリキュラムの中に一般教養科目をもっと多くとり入れてほしいという型で表現されているが、この気持ちの裏にあるものは社会生活に適應するための“人間の幅”を訓練校の教育の中で身につけたいという希望であると考えてよいだろう。たとえば、“訓練ばかりにこだわらず、人間として生きることを大切にしてもらいたい”という意見や、“訓練校にいる者は、精神的に不安定な時期にあるので、人間にとって大切な考えるという時間が必要である”という意見などは、職業訓練校に人間教育の機能をもつことが強く期待されていると受けとめてよいであろう。

こうした意見を分析して感じることは、若い人たちは若い人たちなりに真剣に人生にとり組んでいこうとする気迫であり、そのために訓練校に期待する気持ちの強いことである。

世上の職業訓練校に対する評価はともかく、訓練生にとって職業訓練校はまぎれもなく“教育の場”なのである。

本調査の実施の視点は、この修了生の考える職業訓練と同じ視点に立って実施され、職業訓練校の修了生に関する問題点の指摘をしようとするものである。

いまここで得られた概要を天気図にたとえて整理してみると、“晴天”と思われるところもあれば、“曇り”のところもあり、また“雨の降っているところ”も知ることができるが、しかし、これだけで修了生の全容を知りえたとは思わない。たとえば、雨にも、小雨もあれば豪雨もある。その降りかたによってカサを用意し、雨靴を用意する必要があるように、修了生の問題に関しても個々の事象を具体的に解明するために、しかるべく方法でそれに対処する手だてが必要である。しかし、個々の事象に対処するためにはそれぞれの分野を専門とする研究者の助けをかりなくては容易に解決できるものではなく、ここでは職業訓練校修了生の“天気図”において、“曇っている”ところ、“雨の降っている”ところを次のように指摘するにとどめておきたい。

(1) これまでの職業訓練校では雇用労働者としての技能者養成を主目的にカリキュラムの編成が行なわれてきたが、これからの職業訓練の方向を考えると一つの“手がかり”として、従来の訓練の目的に加えて“個人のニーズ”をいかに満足させるかという点に焦点をあわせた訓練カリキュラムの編成の必要性が指摘されよう。

(2) 職業訓練校のカリキュラムには“速効効果”はあっても“持続効果”の薄いことが指摘されたが、今日のように技術の進歩のはげしい時代の技能者に求められることは、新しい技能や知識に対処する能力を自から培うことである。

そのためには、一人ひとりの訓練生に“伸びる可能性を期待する”訓練のカリキュラムが編成される必要があるだろう。

また、社会人としても健全な常識を身につけた技能者でありたいことが修了生自身からも強く要求されており、とくに中卒者の訓練には、一般教養科目のとりあつかいについて慎重に検討される必要がある。

(3) 修了生の多くの者は学歴をもつことに魅力を感じているが、一方では“資格・免許”をもつことが学歴にかわる働きをするのではないかということも

わかった。この点から、関係各省庁との横の連絡をとることにより修了時に職種にかかわる資格・免許の取得ができるように働きかける必要がある。

(4) 高卒者の“職業訓練”や“職業訓練校”に対する帰属意識は高く、高卒者を対象とする訓練への明るい材料を得ることができた一方で、訓練校を修了したことが労働条件等に反映されていないという者が多いこともわかった。訓練校としては訓練を受けて技能を習得したことが労働条件等に考慮されるよう、そして、労務管理の中に正当に位置づけられるよう働きかける必要がある。

(5) Q45の自由記述欄で、修了生の表明した意見のすべてが妥当性のあるものとはいえない。しかし、Q45に表明された意見の中からは修了生の訓練校にかける期待を強く感じることができる。そうした期待を摘みとることのないよう、実現可能なものについては積極的に今後の職業訓練の運営に反映させる配慮が必要である。